

5月に父が他界しましたので、年末年始のご挨拶は遠慮すべきなのかもしれませんが、クリスマスカード代わりのペラペラ本は例年通り出すことにしました。

大正14年生まれの父は「北の国から」のお父さんのような見た目で、一日に一度口を開くかどうかという無口な人でした。そんな父と話しをした記憶は数えるほどしかありません。一番印象に残っているのは釣りに連れて行ってもらった時のことです。

ヤマメ釣りが趣味だった父は、毎回10匹近くのヤマメを釣って帰ってくることがよくありましたが、その時は僕が一緒だったせいもあって、あまり釣れずに申し訳ないなと思っていました。岩をびよびよんと飛びながら川を登っていく父に、ほとんどついていけなかったのです。雨が降ってきて、道路添いのトンネルで雨宿りをしていた時に「ぼくが一緒だとあんまり釣れないね」と言うと、父はだまっていました。雨があがって、遠くの山に光が差し、濃い霧が流れてきました。山の緑に映える霧にみとれてみると、となりにいた父が「うつくしかねえ」と言いました。こんな事を言う人だったのかと驚きました。

父は若いころ、文学青年で、文芸誌に投稿していたこともあるという話を聞いたのはお葬式の時でした。戦争中、通信兵として上海バンスキングのころの上海にいたとも聞いています。二度目の出征でひどい目にあったらしく、戦争の話はしなかったようですが、無理矢理にでも昔の話を聞き出してあげばよかったと思いました。

みやはらたかお